

梅雨時期の高温に対する技術対策について

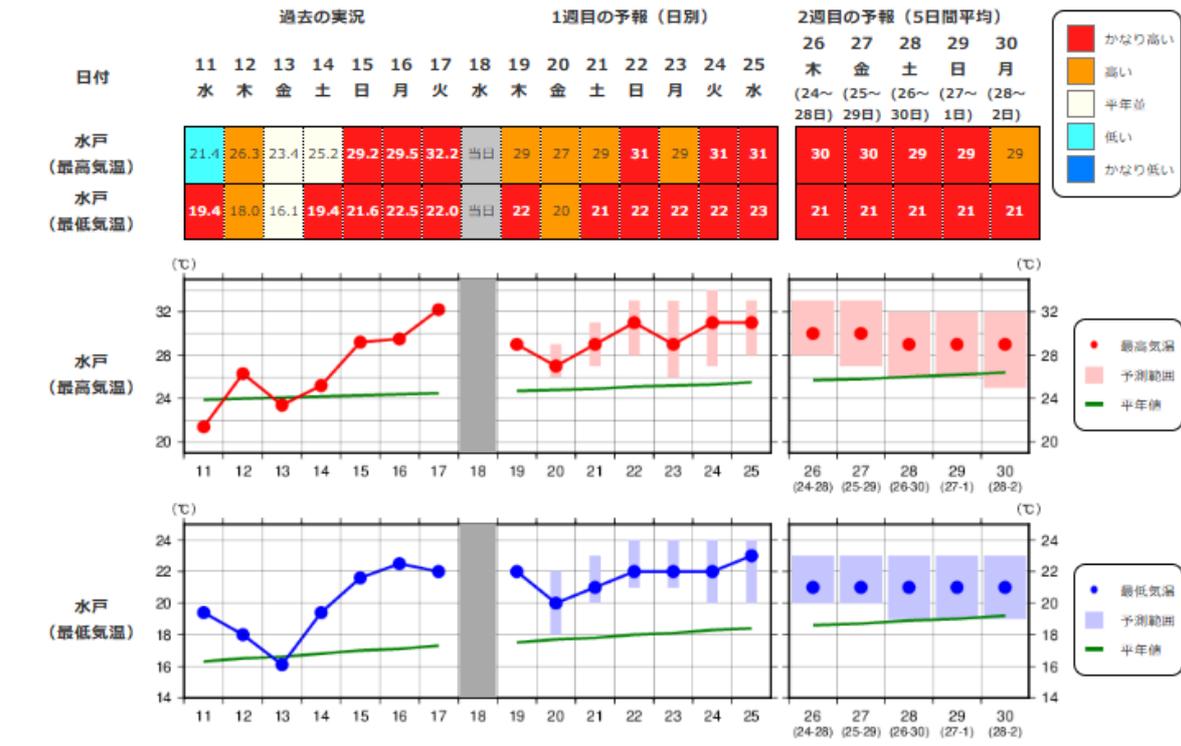
農業総合センター
専門技術指導員室

●気象情報

6月12日に気象庁が発表した「1か月予報」によると、向こう1か月は、平年に比べて曇りや雨の日は少なく、気温はかなり高くなると予想されるため、農作物の生育等への影響が懸念されるようです。

このため、高温による農作物等の被害防止に向けて栽培管理等に注意するとともに、熱中症の危険性も高まりますので、農作業時の健康管理に十分注意してください。

【茨城県の2週間気温予報（2025年6月18日17時更新 気象庁ホームページより）】



●対策技術

I 共通事項

1 栽培管理全般

- ・高温が続くことにより、農作物の生育ステージの急激な前進が想定される場合は、農作業計画の適切な見直しや農業資材等の確保に留意する。また、県病虫害防除所の病虫害発生予察情報の収集及び適期防除に努める。

2 熱中症対策

- ・熱中症対策として、高温下での長時間作業を避け、こまめな水分と塩分の補給や休憩を取ることに加え、冷却ベスト、ネッククーラー、深部体温を計測する機器などの熱中症対策アイテムを効果的に活用すること。特に、高齢者はのどの渇きや暑さを感じにくく、気が付かないうちに熱中症になる可能性があるため、単独での作業を避ける、異常がないか家族や従業員等が定期的に巡回を行う等の対策を行う。
- ・熱中症予防に関する情報「熱中症警戒アラート」の通知機能を実装した「MAFF アプリ (<https://www.maff.go.jp/j/kanbo/maff-app.html>)」等を活用する。
- ・令和7年6月1日から改正労働安全衛生規則が施行され、熱中症の重篤化を防止するための「体制整備」「手順作成」「関係者への周知」が雇用主に義務付けられました。

3 チェックリストと農業版BCPの活用

- ・「自然災害等のリスクに備えるためのチェックリストと農業版BCP」(農林水産省ホームページ https://www.maff.go.jp/j/keiei/maff_bcp.html) を活用して、自然災害等のリスクに対する備えの意識を高めるとともに、農作物等の被害防止に向けて事前に必要な対策の実施に努める。

II 作目別対策

1 普通作

(1) 水稲

- ・6月中旬までの県内水稲の生育は、平年(R2~R6の過去5年平均値)に比べて、草丈がやや少ない~平年並、茎数が少ない~平年並、葉色がやや薄い~やや濃い、である。
- ・4月下旬~5月上旬移植では、6月中旬現在、多くのほ場で既に中干し適期を迎えているため、今後の高温で過剰分けつや籾数過多にならないように、中干しの徹底等に努める。
- ・籾数過多に対応する中干しは、田植え後30~40日を目安に開始し、5~10日間程度(田面に軽くヒビが入る程度)を目安に実施する。
- ・なお、肥効調節型肥料(いわゆる基肥一発肥料)を使用した場合でも、ほ場での生育・栄養診断の実施による適切な追肥に努める。

(2) 麦類

- ・刈り遅れにより繰り返し降雨に当たると、発芽粒やくされ粒等の発生による品質低下だけでなく、DON や NIV 等のかび毒の産生を助長する原因にもなるため、気象予報等に留意した計画的かつ効率的な収穫作業に努める。
- ・収穫後、適切な水分まで乾燥する間に赤かび病菌が増殖し、かび毒が産生される場合がある。これを避けるため、収穫した麦は可能な限り速やかに、乾燥調製施設に搬入し乾燥する。やむを得ず乾燥するまでに一時貯留をする場合には、通風等により速やかに水分を低下させる。
- ・ほ場で赤かび病の感染を確認したロットは、必要に応じて篩目を県基準（小麦 2.3 mm、六条大麦 2.2 mm、二条大麦 2.5 mm、裸麦 2.2 mm）より大きくする等によって、かび毒濃度の低減に努める。

(3) 大豆

- ・播種直後の干ばつは、出芽遅延を発生させるため、ほ場の乾き具合に注意する。また、播種前の砕土や整地、播種時の覆土や鎮圧を丁寧に行うことで、乾燥による発芽不良を防ぐ。
- ・近年、高温の影響によりハスモンヨトウ等の鱗翅目害虫の発生時期が早まっているため、こまめにほ場を観察して早期発見に努め、適切な薬剤散布を行う。

2 野菜

(1) 全般

- ・かん水は時間帯に注意し、特に高温が予報される日は早朝・夕方に実施し、必要に応じて 1 日当たりのかん水回数を増やす。
 - ・地温上昇の抑制や土壌水分の保持を図るため、適宜、地温抑制マルチや敷わら等を活用する。
 - ・施設栽培では、妻面・側面・天窗の開放や循環扇の利用により、通気性を確保するとともに、遮光資材等を使用して施設内の温度上昇を抑制し、適切な温度と湿度の管理に努める。
- ※循環扇は、局所的な高温空気の滞留を防ぐとともに、施設内温度の均一化に効果的である。夜間や曇雨天時等の高湿度条件下では、循環扇を使用するなどして湿度を下げる。
- ※曇天後に、急に晴れて高温強日射にさらされると激しいしおれを起こすことがあるので、速やかに遮光を行えるように準備しておく。
- ・こまめな除草や側枝、弱小枝及び下葉を除去し、風通しを良くする。
 - ・苗床では、コンテナなどによる育苗箱のかさ上げや苗の間隔を十分に広げるなど、風通しを良くする。
 - ・軟弱に生育している作物への薬剤散布や高温時の薬剤散布は薬害を生じやすいので、使用基準の範囲内で散布濃度を低めにする等、注意する。

(2) 葉茎菜類

- ・乾燥によるチップバーンを防止するため、薬剤防除時にカルシウム剤の混用を検討する。
- ・特にねぎでは、過湿と高温により白絹病・軟腐病発生リスクが高くなるため、ほ場の排水に努める。

(3) 果菜類

- ・しおれ予防のため、こまめにかん水を行う。
- ・不良果の摘果、早めの収穫により着果負担の軽減を図るとともに、適切なかん水・施肥により樹勢維持に努める。
- ・老化葉、黄色葉を中心に適切に摘葉し、水分の過剰な蒸散や呼吸の抑制に努める。
- ・カルシウム欠乏、鉄欠乏、ホウ素欠乏等の生理障害対策として、必要に応じて葉面散布を行う。

(4) イモ類

- ・6月中旬以降の挿苗は、活着不良や肥大不足の原因になるため、早めに挿苗するか、止むを得ずそれ以降に挿苗する場合は、日中の高温時を避ける。
- ・近年、鱗翅目害虫(ナカジロシタバ、ハスモンヨトウ等)の発生時期が早まっているため、早期発見に努め、早期防除を行う。

3 果樹

(1) ブドウ

- ・果粒軟化期(ベレーゾン期)前の果房は、日やけ症、縮果症などの生理障害が発生しやすいので果房に傘かけ(紙製の傘)を行う。
- ・根域が浅いので、株元の根域への少量・多回数のかん水が有効である。晴れた日は、午前中に毎日かん水すると良い。
- ・ほ場の夜温を下げるため、夕方の散水も有効である。ただし、過散水は多湿となり病害発生を助長するので注意する。

4 花き

- ・切り花については、朝・夕の気温の低い時間に採花し、常温で長時間放置しない。
- ・エチレンによる劣化を防ぐため前処理剤を使用し、品質の維持に努める。
- ・施設栽培の花きについては、施設内の温度上昇を抑制するため、妻面・側面を開放するとともに、遮光資材等を使用する。細霧冷房装置や換気装置の使用により適切な温度及び湿度の管理に努める。